

みなと・新橋

今・むかしの新聞

第5号
平成29年3月

『戦争体験を語り継ぐ』

昭和二十一年（一九四五年）年に迎えた第二次世界大戦（太平洋戦争）の終戦から七十年が過ぎ、当時の苦しかったこと、悲しかったことを、実体験として話すことの出来る方は少なくなっています。同時にその話をすることは辛く、悲しく、いやなものではない。

しかし、『戦争の恐ろしさ』・辛さ・悲しさ、そして平和の大切さを伝えて行くためには、その時の真実を語り継いで行かなければなりません。今回の『みなと・新橋 今・むかしの新聞』では、厳しかった時代（終戦前後）の思い出を「語り部」の皆様にご提供いただきました。

「運の良い男」

神代 忠勇

私は誠に運の良い男です。現在あと五年数ヶ月で百才になります。それだけで運が良い訳です。

私は所謂（いわゆる）「学徒出陣」で太平洋戦争の為に軍隊に召集されました。その時直ちに戦地へ派遣された者も居るのに、私は六本木の「近衛（このころ歩兵第三連隊）」に入隊させられました。そして、幹部候補生の試験に合格して、幹部候補生の学校に入り六ヵ月後卒業の時、その半分が戦地に行かされましたが、私は内地に残されました。更に見習い士官として航空軍に転属して仙台飛行学校で訓練を受け、その卒業の時も半分戦地半分内地に分けられた時、私は又も内地に残されました。

その後、陸軍少尉として浜松で新兵教育をやり、あと一ヶ月で部隊編成して戦地に出撃する筈の所、戦争が終わりました。浜松では敵機の爆撃を受けた時も、



同じ防空壕の隣に入っていた部下にワンバウンドした銃弾が腹に入って血が噴出し、私がかついで医務室まで運びましたが、医務室で絶命しました。この時も私はたった一メートルの差で助かったのです。私の大学の同期一三〇〇名居りましたが、約二百名戦死しました。また、戦後の混乱期を共に過ごした戦争生き残り組の友も、現在は殆ど死別しました。まだ生きて居る私は

誠に運が良いとしか云えません。それでも親しい友も殆ど居ないので、誠に寂しい一人住居です。私自身本当に運が良い男とは思えない昨今の寂し



「茨城県に縁故（えんこ）疎開」

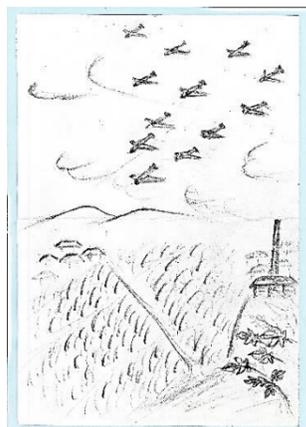
中嶋 房子

私は昭和十八年、桜田国民学校に入学し、昭和十九年、二年生に進学する四月、茨城県笠間市に母親、兄と共に縁故疎開しました。疎開中は月一回位、東京から来る父を、笠間の田舎の駅で長時間待っている時のさびしかったのを覚えています。

笠間は上野から、土浦、石岡、友部、日立と飛行場や軍需工場、海軍飛行予科練等が多くあります。昭和二十年に入って空襲警報がたびたび発令されました。

三年生に入り警戒警報のサイレンで下校する日々が続きました。ところが、たまたま警戒警報のサイレンが、離れ教室の私達のクラスだけ聞こえず、空襲警報で下校することになってしまいました。（※当時、警戒警報の鳴ったあとに空襲警報のサイレンが鳴るようになっていた。）学校を出て、途中中田んぼ道に来た時、空を見ると艦載機が連隊を組んで向かってきました。「絶対絶命！」低空まで飛んでくる

です。ちょうど田んぼの側に桑畑がありました。（笠間地方では養蚕農家が多かった。）私達は桑畑に飛び込み眼と耳を押さえて（日々練習させられていた）伏せておりました。



男の子はパイロットの顔が見えたと話しておりましたが、あの瞬間は生涯忘れられません。当日、中学生が駆で撃たれたとの知らせが流れました。

当時、疎開家族は食へ物が無く、野原で『のびる』とか田んぼで『せり』『だにし』とか採って食べていました。栄養失調状態の生活。麦、大根、さつまいも等、色々の雑食で小学校時代（成長期）に育ちました。

今は、当時を振り返ると夢のような恵まれた時代です。戦後、昭和三十年代の日常の食へ物が一番自然な和食で、世界遺産に値するそうです。飽食時代と云われる今日、私達は経緯を生かして心して暮らしたいと思っています。

「1褒美の塩おむすび」

武 恒雄

昭和十八年、国民学校三年生の三学期、父の会社の疎開に伴って、東京から仙台に移住することになった。現在では二時間足らずだが、夜行列車で一晩かけて辿り着くと震え上がるような寒さにまず驚かされ、さらに行き交う人達の耳慣れぬ言葉の訛りに不安がいや増したものだ。それでも子供のこと、通学路は小川に添った細道。野の草、大小様々な木々の四季の変化を楽しみながら、すぐに田舎の子になっていた。

仙台が空襲を受けたのは二十年七月十日、我が家は郊外なので直撃は免れたものの天を焦がして燃える炎の恐怖は忘れられない。

万事が欠乏の時代、不自由は当たり前だが、特に食へ物には誰もが苦しい思い出を持っている。そんな中でもこんなこともあった。

学校に隣接する田圃の秋の取り入れに、上級生全員がお手伝いに行った。役に立つより邪魔をしていたようなものだったろうが、終わってからお礼に真っ白い塩おむすびが一つずつ配られた。

日頃からひもじさを我慢している子供達に最高の

褒美をどの農家の方の温情だったのだろう。歓声を上げてかぶりついた。嬉しかった一日のことよく覚えている。



「疎開地を尋ねて」

高橋 邦子

「疎開地を 尋ねし車窓の 彼岸花」

四年半の介護の末、亡くなった母の面影を求めて、私は、栃木県塩谷郡仁井田の駅を降りました。今は、母の十三回忌も済み、十五年も前のこと

疎開当時、私は六才、芝浦国民学校一年に入学したばかり、空襲が激しくなり、母・兄・弟・妹と栃木の親戚を頼って疎開、仁井田駅近くの文鏡（ぶばさみ）小学校一年に編入しました。

七〇年前の記憶をたどって校門の前を訪れると、今は農業学校に変わっており、通学路に沿って流れていた小川も埋め立てられ、藁ぶき屋根の家も、カプルのなタン屋根や瓦屋根となっていました。九月でしたので家々の庭先や土手に咲く彼岸花が当時を思い出させます。

母は、昭和十九年生まれの子を背負い、芝浦へ生活必需品を取りに行くため、駅に続くこの道を往復していました。母の帰りを待ち侘びる私は、夕方走って停車場まで迎えに行きました。

終戦後、親戚の世話で木材を調達。昭和二十年五月二十五日の空襲で焼失した芝浦へバラックを建て、兄・二人の弟・妹・母・私の生活が始まりました。まもなく、フィリピンに出征していた父も帰還しました。家族での生活は再開したものの、食糧難の上に、家業の遊船業は船も焼失し、父は陸に上がった河童のようでした。それでも日雇いの仕事をして私達を養ってくれました。今でも、ゲートルを巻き、戦闘帽を被った父の姿を思い出します。兄は中学校を卒業したかしないうちに働き出しました。私も働きながら、三田高校定時制を卒業。上の弟も新橋の企業で働きながら芝商業の定時制を卒業しました。ようやく妹から雇間の高校に通うことが出来ました。

疎開当時、母に背負われ栃木と芝浦を往復していた下の弟は海が好きで、芝浦小学校四年の夏休み、近所の釣の船屋の船に乗せていただき、お台

場へ海水浴に行き溺死。夜、弟の半ズボンと運動着が届けられ、一人で死んで行った弟を思い泣きました。母はもっと悲しかったと思います。



芝浦は会社が多く、まだコンビニやレストランのようなお店がないこの頃、母はコップパンや牛乳を仕入れ販売、シヤム、マーカリンサンドや手作りのサラダのパンがよく売れました。

戦後は、皆、一生懸命働きました。

「戦争体験者 私達の願い」

中嶋 弘

私は疎開せず、戦争中もずっと新橋に住んでいました。当時私は芝公園の正則中学の生徒でした。

週一回は日比谷公園で軍事教練が有り、ゲートルの巻き方や銃の扱い方を、陸軍中尉の下、皆で教練を受けました。



戦争が始まって一年半の頃、私は神田に本を買いに行った時、有楽町の駅で敵機の上襲に遭い至近距離で爆弾が破裂、破片で負傷しました。当時はまだ救護体制が整っておらず、帰宅後近所の診療所に行きましたが、消毒して縫合しただけ、今でも左腕の下にその破片が残っております。近年、港区の小学校の社会科の授業で空襲の話をした後で、皆に見せ、触らせてあげます。当時は、未だ焼夷弾（しょういだん）による空襲は始まっておらず、おそろしく敵機が試行的に行っていたのではないかと思います。

実家は「外食券食堂」（外食券持参者に食事を提供するよう政府に指定された食堂）だったので戦中戦後もそれ程食へ物に困ったことは有りませんでした。仕入れのとき米俵をリヤカーに積んで街中を通ると皆から奇異の目で見られていた事を思



い出します。店は、汐留駅の通りの角にあり、戦車が曲れないとの事で強制撤去され、仕方なく田村町一丁目（現在西新橋）に移り、店を再開しました。空襲のときは家族で日比谷公園に避難しました。翌日の朝、家に戻ると一面焼け野原、金庫が一台ボツンと残っていました。扉を開けてみると、コップに水を汲んで入れておいたのですが空になっていました。

八月十五日の正午の終戦ブチ才放送は受信状態が悪く、はっきりとは分かりませんでした。戦争に負けたりといふのは、なんとなくわかっていました。

空襲で焼けたコンクリート「田村町食堂」としてバラックで再開し、開業による立ち退きに遭うまで続きました。

最近では実際の戦争体験者も少なくなりました。子供達に暗い戦争の話は聞かせたくないと云う親も居ます。一度は戦争を起さなければいけないと思う私達の願いを、次の世代も引き継いで欲しいと思います。

「防壕のじゆ」

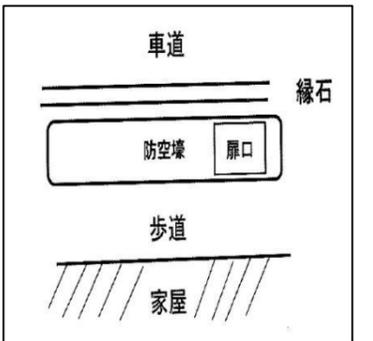
井上 繁

爆撃機が空から主として爆弾を投下し相手に損害を与え、その対象は主として軍事基地や軍需工場である。だがこの前の戦争では、都会であってもいつ爆弾が落とされるかもしれない。落下地点では被害の防ぎようが無いとしても、周辺では爆風による人的被害をより少なくするため家庭にも防空壕を設けることが奨励された。



最初多くの家庭が作ったのが台所の板の間の上げ蓋を上げ、その土の部分に深く掘り下げた程度の物。だがそれでは不十分と言いつつことになって、家の外の道路の部分に横に長い穴を掘り、上部に木材を渡したり、トタン板を敷いたのりして、其の上を土で覆った物が作られるようになった。空襲警報が鳴るとその穴の中に身を潜めるのである。

私の所でも家のすく前、日比谷通りの歩道部分に横一メートル、長さ二メートルほどの物を作った。しかし当時の日本の家屋は殆どが木造だったか



ら火災を発生させるほうが効果的と、都会への空襲では爆弾ではなく焼夷弾が使用された。その上落とされる焼夷弾の量の多さときたら並大抵のものではなく、落下目標とされた場所は広い範囲全体が一瞬にして火の海、バラバラと落ちてくる焼夷弾の間をかいへる、炎の中を逃げ回るばかりではない。防空壕になんか入っていたら逃げ遅れて焼死してしまうという事で、骨折って作った防空壕もすぐに無用の長物と化した。

なお、芝公園内の御成門交差点寄りの広場に大型の防空壕（人が避難して入るためのものではなく、何かの貯蔵施設であったかもしれない）が作られたが、私は内部に入る機会がなく、その詳細は不明。地上部分がちよっとした丘のようになっていたので、戦後になってそこへ昇る階段が作られベンチも何脚か置かれて、公園を訪れる人の格好な休憩場所として結構長い間利用されていた。今は取り払われて平地になっている。

「小一だった私の戦後」

宇和島 常子

私は滋賀県米原町醒ヶ井（さめがい）と言つて東海道線沿線で中仙道沿いにある田舎町に生まれ育ちました。冬になれば、もくもくと有名な伊吹山からの冷たい伊吹おろしの寒い町でした。



戦時中、山ひとつ向この町、大垣に爆弾が投下され真っ赤に染まっている時、消防団長だった父は、いつも家族をおいて出かけて行きました。子供心に不安でした。

家は、代々呉服商を営んでおりましたが、戦後の農地改革で畑畑全部を没収され、祖母が嘆き悲しんでいた姿は忘れられません。こんな田舎でも食料が不足し、店の商品を農家に持って行き、米・麦・野菜等々と交換してきました。小麦をつとんにして来るのが私の役で、隣町へ汽車に乗り警察署の前を通る時は、さも軽やかに通り過

ぎ、つとんと交換出来たときは、うれしくて早く家に着きたかった事を思い出します。

また、父が呉服商でありながらコンビニヤクを作ったり、今川焼きを作ったりして、行商に出かけるのを見て、不思議でなりません。戦時中は何でも屋だったのですね。でも、売れ残りを持ち帰りがっかりしていた姿が思い出されます。

戦後何年かして、庭先の松の木の根もとに戦時中父が埋めていた日本刀など掘りおこし、一日中何とも言わず、眺めて手入れしていた父の姿を思い出します。

その父も「自分は六十才で死ぬ」と言い当てるように、六十才の誕生日の二カ月後に旅立ちました。

「おんゝの『語り部』ついなあじふ」

平成十三年「生涯学習ボランティア講座」事業として、生涯学習センター内桜田小学校記念室に、新橋界隈を中心とした区民の方々が集まり「昔の港区」の学習会を行っています。

平成十五年からは、これまでの学習成果の発表の場、また小学校の学習支援活動として、語り部のメンバーが小学校に出向き、子どもたちいろいろな昔の話をしています。

地域の歴史や暮らし、また戦争の貴重な体験など、過去を風化させずに未来へ語り継ぐことが大切であると考えているからです。

この「みなと・新橋 今・むかし新聞」もその一環として発行しています。ぜひ、興味のある方は、はるーんまでご連絡ください。

平成 28 年度の活動



発行・問合せ
住所 〒105-0004 東京都港区新橋三十一-三
電話 03-3433-1166
公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団
港区立生涯学習センター（はるーん）